安政見聞錄

上

ヲ1
3628
1

門 ヲ1
號 3628
卷 1

早稲田大学図書館
昭25.6.19
購入

紀
抑漢

古今の傳記に稱するもの。牛に汗し棟
を埋すまでに及び。繁きに成て閲易ふき
漢文の書よりおける。文字を減じてそのの通
ぎるが如ヒ因りて。注釈。但徠先生ぞ斟酌
富實盛の。傳を門人等ふ纂ぶて。文字少
を用ひるなり。古人の死ふもいくを。を捨いか何

まことに聞き知らざる事作る者の功いまだ延びずと
いへども作業まさに時の通じざるにあらず。周く
今この見聞録を文章の巧拙いまだ
信達手語を新へ善惡邪正の分別をもとめ
見聞のまゝ掲げ出し。人毎心の獣べたるを
專らふ慎すふん。抜きき人ふ五乱七情あり。
喜怒哀楽の間より方て。動きしれば人の机も其
常を失ふ。平生思ひを深くして心中

可感悟を推ば。必ず変化の時より除み。恩
を忘れず義を顧ぶの。物語をさく具いよ拳
て。臺墓雅如を勵ふの一端なり

たゝきあり

于時安政丙辰季夏

罪人蘆漁父題

安政見聞錄卷中總目標

卷之上

地震の辨
孝婦非命に死するの條
孝女死期に紀念を遺す條
異綫の老丈天變を知る條
士人自刃佃民を救ふ條

卷之中

父母に先ぎして道を選て哭ふの條
地震によて兄弟の肉を脫する條
流言を信ずるの禍ひを招く條

地震の前後地脈狂ふ條
地震の方角を以ふ條

卷之下

節婦家を損て夫の死骸を拾ふ條
父母を護して戈を忘る男の條
瞽老未然を知るの條
地下より火気を発するの條
神州蒼民を憐こむの條
嵐土中より多く生ずる條
蝦蟇巨蛇と鬪ふ條

通計十七條總目的畢

安政丙辰四月廿日
より深川富ヶ岡の
境内ふく下徒の者
成田山不動尊の
開帳あるを賑ひ
夜今に稀なり

一寿斎芳晴画

凡例

○
此書ハ元来我子孫ヲシテ忠孝義を励まさんが為ふ。近曾見聞する所を挙て敢て信偽を問ふ。ことなし。おのづから條小多くして所性名の明らかなるもこれ我若さ故ものハ遺憾ある。況今現在の人のよしを。憚りてあらはさゞるもあるべし。其の所の名。某とのこと記しるす。這ハその人ハ用ゐだその行状と志と成述て少年を諭さんまでなるべくまこと画と多く加へハ。幼童の弟に出て。用ゐて成せざるの為のこゝ是の賢愚ふ備ふるべきを

○
巻中ふ去ぬる文政天保度の凶災出来ハ。安政見聞の言ふ差ふ〻ゝ人ども。因ふ〻ゝ録出し。近世のことを知らしめんとその所いとゝ古き世のものを載るもこれふ〻ゝと同云なり

作者再識

安政見聞録巻之上

○地震の辨

そもそも地ハ四圍に竅ありて相通ず。譬バ蜂の巣の如く。また菌の瓣の如くとゝ。形てゝ火の気その中に伏し。火気鈍んとすれハ。水気に推されて鈍ることなそ。人の轉筋のゝとの時ふ動て。火気ハ陽ふして剛き者。ゝ気の陰を突破して発ス。因て大地震動するふ。ゝるとゝ。この理天ふある時ハ雷霆ふ鈍し。ゝをりて北極の地の如きハ火ふ寒ゝて熱を生ずることなそ。まゝ赤道の下ハ火陽の気ふ勝まして教ゝ易く。ゝるも是ふ因て若震ふて少なり。温暖の地ハ地ハ下に空穴ありて熱気吹入て。冷気の為ふ抑飲極まることハ大ふ震ふ。その甚しきふゝるりてハ。地裂け山崩て。江河逆に流るの類

災害極まりあきに及ぶ。凡そ天地間災変の尤りの。地震ふ勝るものか。和漢古昔よりこの患へ史ふ又えゝる所挙て数へゞ。然とも史ふ大地震人民牛馬多く死するとのこ載て其精きをのそぎまゝ。今まを案するにすゝ。近来誠後こ條の地震及び文政の変東師の地震。天保の変信濃の地震名い年を去ると甚遠うゝびとのへども。この傳聞する処匿くふて。その精しきと知ゝゞ。嘉永の変東海道の地震い。ゆて近きてあゞゝ。ゝまとて絡る人ふよりて大に差るとあまゞ。傳聞極めて定りあゝゝび。ゞ人馬の圧死或ひい焼の本統を失て。その変異の度大なるを案するのこ。然るふ大江都い地震甚稀ふて。折節ふ動あゝしのへども。屋瓦を墮さふのゝゝゞ。俗ふいへ江都い掘抜の井と称する多し。故に地

乳常に教ぎ。ゆゝをもて大震あることゝ。と人大ふ安情せり。然るふ去年安政二丁卯十月二日の夜実の刻過るひ暴ふ大地震動して。殿舎と城ゝ民屋壊ゝ倒ゝのこふあゝぎ。八方より火燃出て。晴夜も完然白晝の如く。二十餘箇所の失火焔天を焦し。民家の男女梁ふ歩ゝ成ひい棟垂木に圧ゝ。あるひい土庫の壊るふ巣つて。死するりの救ゝとゝ。ゞ適命全きも。物ふ挽まれて出ることゝ得ゞ。親族その傍ふありて。扶んとすゝとゝ力ゝゝび。大編須臾ふ近づくふ及びゝまを救ふふ遑ふ。看為ゝ活あゞゝ。猛火ふ燈ゝ忽ふ灰燼とゝて。憐むべきのまゝ。きゝ。ふふの凶変に遭て。或ひい圧ゝ死。或ひい焼ゝ死。或ひい折ゝて廃人とゝるりの挙て筭へゞ。ゝゝ各悪人ふあゝゞとゝども時の難ふ罹て。淑命に終る。敢て善悪の差別を問ゞ。この時ふ

妻ハ善者とのゝ人も免はゝ上ゝ妻ゝ雖し。ゝ時の幸不幸のゝ家ひも
うけざる変災に遭ひ。強授忠懼の時ハ為ひて常ゝ至孝あるひい忠臣。
その心がけよき人の自ゝ功を顯ゝしゝるあり。今傳ゆゝる処の二ゝを
挙て後生ゝ勵まゝ。然且どもその位所姓名の詳あるも憚あきハ
あゝれば紀さん

○孝婦班令に死きその條

于茲武政千位者とハ日光道中の出ハゆて。大ハの旅店軒とうゝへ。
多酌とのゝども繁華ゝり。まゝハ何某とのゝる高貴の嫁。その年二十
一三ゝりゝ。常に姑ハよゝ仕へて。孝行をつゝけ。然るにその夜の
変災ハあひ家内の男女十五六人。破壁忙震ゝとのひも果び。対面を
作て逃出るハの嫁ハ舍に在て汁線とゝけるゞ火ハ強きて汁ゝ

矢庭ハ戸を蹴ひゝきて。庭の方へ立出るハ瓦の落るゝ風ハ木の葉の
震ハ異ゝりゝ。薪搭ゝもゝるゞうちに忽忙推け倒ゝ。ゝハ什
麿いゝる孫来ぞと眼も顧と胸裏き。渾身戦慄と震ひゝを知
に倒ゝて在けるゞ。佑と心づきて此者を見まゝ。姑のゝえざるハ。老
人の足弱くて。出ゝるのゝ難しのゝんと。嫁を撥ハふゝを呼バ。案の
ぬく姑ハ。強きて逃出んと。身ハ記せゝど歩行ゞゝ。孫ハ驚火ハ頓
ハ消え心周章て途方に暮。仲吟うちに震漲く。障ハ外を隔居
ぬけて。汁先ハ撲ゝり。進退の度を失ひて。更ハ生ゝる心地もゝて。
嫁の嫁ゝて母さゝハ。何方ハ在ゝと救四呼ぶ。孝の吟ゝ。ハ姑ハ力落
て。意此処ぞと田舎あゞゝ。そゝを郷導ハ出んとゝ。嫁ハ姑の袂を入
まゞ家の内ハ在ぜゝ。頓く此方へ出のゝと叫びあゞゝ近入ゝて矢庭に

孝婦姑を
救ひんとして
還て非命に
終る

一寿亭
豊国時画

を背に負ひ。そち出んとしるをり。憐むべし。その侍の振捨て
梁そのうへふ落かゝり。二人諸共ふ倒さまに転あぐんとするも甲斐なく
壓にうまて即時に死せり。書下壁い用の車あり。他所ふあきと在り
けるが。忠農に強き止むを候て。そこ元つふ独帰つ。家内の者の心絆
るゝ。その侍を索めるに。召仕ひの男女多ふ大うこと外面ふありぬまど母と
妻のあゝざるふ強きうまとばその家居い崩と頽き家根落て内へ入るべ
きやうもなう。依こそ二人いその程に呻吟あるのみなるめと変をあげく
名を呼べど。更ふ對へもあゝざまばのうく心も心なうず。逃出さる下奴を呼び
よせ力を竭して覆ひる。家根を穿ち倒まさる柱棟を澎ふ取除て
こまを引るに。妻の背に母を負ひ。その まゝ手如ふ傷して。二人ともうち
臥めうまを七竅より血滴つ。月もあてうまぬ景勢にや悲歎ふうまけるが。

然てあるべきにあゝざまばば。頼て稽を懲へ香華院へ送りしとうん
拝まそのうく婦人の志丈丈ふ程倩まり始め強きて最後を願
こまば。身を汲て逃出さる事人の情とゆべし。然るに始のうへざる
ふ強き。震動を懼まばば。破壊しる家に近入つてこまを負ひ。
災害を遁んとせしふ不幸にして非命に死ん。後にこまを拝まゝく
始め逃るとき諸共に伴ひうまば。この難いあゝざるべきに。その時
こまを捨まうの至孝しのひゝうまば。是その程ハ然るとあゝ。愛に
除こて動ゝざるハ賢人君子のよふこそあるゝ。男子しのへども凡人
のゝ。ゝ二心不動ゝうん。況や女子に於て。この婦のできハ至孝し。
称すとも過失ゝ。こ怪しむ彩のごき志ハありゝ僅二三
歩の間ふて。死を免ゝうこと能ざるハ。実に天命とゆふのみうん

○孝女死期小紀念を残す條

去る寅年をさぬ深川冨川町の名とる桐屋の何某なる者以前は有徳ふ蓄えなれども薄命のうち續き今は次第に困窮なれば召仕ふも暇をとらせ寡婦なれば下男きー對ひ夫婦のごとく親しく送りけるが十月廿日ばかりの年忌にあたるふより心ざしの佛事をいとなこ親き人ふも依者せんと同二日八逮夜とて朝まだきより野菜を調へ来るなど炊くをりから隣一二町を隔てし所に大工何某なるあり娘二十ばかりになりけるが日来親しく往ふふより今日の佛事のみ偶ひせんとて此家に来りて甲斐甲斐しく働きて夫婦がけをぞ助けるかくて夜代時ばかりとなりて桐屋夫婦ハあるを止め去る夜刻ふも程近くなんふ今

翌の朝とく帰らるるよとのふ言ふ任せて遁りつ程なくちちとせ一週間ばかり推かづけて夫婦とも折うち暴に虚空動揺す。その家ねに覆らんとせ人ハ大に怪きて表の戸を引開て夫庭に走り出けるが桐屋の搖倒見て大道へ撲らるる。今ハ遅うるばかりの搖に手足ふ傷んを免ふるーと雖も息切て跪こ居る。かの娘いまを見て父母の身のうへ心許なく「脇まうけとのひも教ば」教ふ近出に夫婦ハ呼び止めたるなり。今諸共に行て防ん。愛時祈れとのひけるとぞ。吟えやまず吟えずや。回答もせぞして走りて桐屋ハ妻に向ひ日来より孝心の世ふ勝れたるりのなるを。心程然もあるべー。程近けるとぞ疾更なり一人やふ帰されど。我ハ跡より遂着て彼家へ送り達ん

ふ。されども其ハ在つて家を護ま。とのひ捨て逃出ーが。此処なハ
殊更地震剧く。且家他之蔵されば。大くさ倒まぎる家もあらば。
残るに家並ハ六ハ軒。ゆきける所ふ女の変して。嗟苦ー助てよと呼る
変をほのきけば。かの娘にようく似たり。柏屋いぶりて。全知る此処なる
こびねるに。傍の稜の崩ま「下に。身を挟まれて起もあぐらず。頻りに
叫ぶ其の娘なり。柏屋なるより大ふ疲き。はまぶこそ我。俱に泣
ゐばかる道あらドを。怪くらぬとてげりとのひあぐら稜一の倒ま
ー桁ふをうけて。引起さんとなーけまど。生憎に桁大きくして。一人
の力に動もやらぞ。その色ふも老若男女。右往左往に群がれど。
親ハふを又失ひ。妻ハ夫を索ねて。仲今まぶ雑あのてこまを
抜んとするのあらば。兎角寸間に二三軒。あるこより火燃え出て。

忽地猛火燃になり。煙ハ方に飛びちるわどに。彼響火ゆよと驚くに。
崩ま「家を捻除て。資財雑具を出さんとせとの時壓にあまたなるう。
まぐ死やらば猛火の為ふ。燔まんとまるるの。変を限りふ泣き叫び助
けてよと人を呼ぶ実に焦熱の苦ーこも。あまぶふ遊ーとるるわどに柏
屋ハ見るの変に驚き。と裏き狂ひ心急てかの桁を揚んとすれ
ど力及ばぞ。業下柏屋の妻ハ煙ふ疲き夫を索ねたるふ来まぶ。柏屋
いくらを来ぬ。力を副てこの桁て引起せとのふわどふ妻も心の利ら者
あて。彼方へ廻り諸多をうけ。力を究めて引けまど。垂木壁土屋根瓦
ぬぐよに重り乱ばるくに動ら。一人ー夫婦ハ志きりに心を焦燥て扶
こすまど術計あらば。その間ふ焼落る火燔ハ既に近づきて。ふ身の
ふ及んとせ。この時娘ハ弱ら果ら変を出して夫婦を呼びハ志ハ然る

安政見聞録
危急の際友を親と思ふ紙も念と記す
梅坊主

なぐら。今かも火も近づきて。免れんとするに所の。悪妻を投んらく。
四方皆まで不怪家あるべのよくこの身の罪深うり。ま捐ぬきておーも
ま〻火を遁れるべう。所捨この身い罪業深く。かる憂目ふあんとも。
前の世の宿業ふもと思へば今きう捨方ゐー。頼ま方を去るべさうま
四方皆も知ら陸でく。父母ともに年老て。仏の付まで妻をのこ世ふ
憑こと思ひ。無るとまふて死にあらべ。誰を後りて世で渡らん頼くい
四方ら丈婦妻に代つて父母の行末て頼こ来るまのこ死期の
頼ひなりとこの時ふ及びても。程父母を慕ふる切なる心ふ指や丈婦い。
涙ぢくと流ーい。この身のこの心易ふ思ひ。命のあんやどぶよく貢
ぎまわらすべー。と回答ふ猥い歎びて頭に振方蔀絵の指と繪とを
子自接ーり。柏屋の妻ふ〻てのやう。這い年来頼に振て大切に指

ーりの。こまとを初に与へらまと。つぐ紀念ーと思ひ出る時ぐふあらべ一遍の回
向をーてのふまと。と云俗の人とのうちふ。ま猛火近づきて。渾身も熱
きわどあまとべ。柏屋丈婦い不便さふ程ちるに忍びざるを。猥い頼く遁と
の。甲婆ふ初に拘ぎらひ遁あらべ悔とも返べ。去来頼くとの人
わどに丈婦い浸殘をーけまとどさてい何とも詮方なけまべ。涙あくふ
立退ーつ。つぐ家も火ふ近づきぬ。及ぶぬまでも美婚の夜新ちくて懐い
ぬ調度をも。一ッ二ッとり出さん。と内へのまとども八方へ吹ちる烟に咽煙せ。
眼ふ入りて働き溺ぎ。ま〻覆つー樹に火さ燃つ入とりけまべ。
までと僅ぢりの秘蔵ことを背負ー。その所をのぐまと頼て大工の方に
ぶりーつるにとあんつぐ方より。震怪きふ彩まべふー。数ふ恙あくぐ長く
まづ秋びて伴のうーを。安ーく帰り櫛箱を。出て母にふまとべ母い狂

気のどくふかり。かの焼址へ地つきて。ふるに娘い焦げ黄ばみて在し姿に
ふれもつぐんで苦しきふ面のと。土ふ衝入まとりとふえ。このこい燐殘ふ解
あまとびとび女児と。ありていらく哀しきの。何ふ嶮へんやうもるく。因しろ
ふと悪しとこと。人くに練めるまと。死骸を野ふ送りせしとうん
評しのちく天道い善に福ひし。悪ふ禍ひまと。然るにこの女ふ
泥に遺ひて。生たちぐるその身を燐る。かる老急の時節に及び。
程又母のうへを忘まぢ。親友に死して潔くしかる志操あり
とのべども。非命に死するを免るまじ。俳家に所謂者業とふ。

あまとるのとをのふやあるん

○異後の老夫天変を知るの條

ちふ二三千石を領する家あり。その門番ふる老丈ありて。年来老

実に仕へける。元来異後ふて文学もあるべ。尋ね人の要たりしぶ。
十月二日の落暮に至り。門外ふ出て四方を瞻る。ちまちに内丈
その同僚小示しのちく。今宵かるべ地震あるべ。その動揺と
げーかるん家に形ぶ怪家あるべ。急て用心をるまに急べ。その
ふとふ他るるべ。才一に食物るりとて。暴にかーの米を炊き。勝
手に入りてある上を焚く。同僚い少て待共に。米を炊き焚もあり。
頓て老丈い莊内を巡まりて人くにそのよーを告けるにこを伝
まる者もあり。また波老丈何をろ知らん。そを天変地妖のでき賢人
者ふも知る上雖し。況やかの老丈をや。必ふに狐狸に変作さまて。
かる強語をふりのるるん。と笑く朝を織つけり。老丈い仮を焚伝
つ。ちる上をおさえ樋に入る。味噌香の物ふど取添へ。裏の方なる馬

場へ出ぬき。筵を敷て夫に居まり。同僚もまたあへ来て。居るるの總て三に個。さるぐの雑談ふ。夜成刻もるこぎ実刻も近づ。夜更どもさせるとるし。この夜天色暖ふして。寒冷にあらざれとも。時々夜十月の初るとゞ。久しくさてふ居るに怪び。老丈に編さまし一心地して。我邦屋に帰るもあり。まこふ大ふ地を伝ひて。のまぐ夜半ふもあよだれを心組ろ帰るとふと。猶あふ居るもあり。兎角まる間ふ夜色りの。折ふ夜実刻なり。この時天色朦朧として。半天ふ雲覆ひ星の光も近くうんも。老丈い往四方を祝やり。物もえのそぎ獨点ぢかるる彩ろ旋風の暴に落さぬき青して。大地忽地動る。ほ色の草木波のごと。屋舎の崩るる音耳を貫く。老丈い使こそと筵の上ふ腰を空して病き居ろ。暫時ありて動揺静まり。老丈を始め回居一のども。

徐くとふち出て。荘内を見巡るに。或ひ家の倒るに一方あり。或ひ板屋梁をもて。ことに壓死するもあり。まこふ足を摧るもて。死もやゝ憂くあり。ふい親を棄れ親いふを。喪ひて泣叫ぶ。このさま更ふ目もあてられぬ。奥いふふと行てるに。見まる大ふ崩を抜ひて。往べき方へいえもやうとゞ。火燒ひ家ひかりて。既に火の燒んとまるあぞ。老丈い同僚にかくと告て。水を汲来ることを消一。まづその悪きを防ふ。かくて後この森のうと人。このことを伝て老丈を召し。海何と。てあるとを知る。実ふ汝あり。せぶ。この森忽地焼土とかへ。丈を張め荘内ていとり一こと功績ありまと。数多の賞美を獲りけるとゞ。老丈いこまを謝して。いへやう。下僕男体丸丈ふて。いでる天地の意を知るべき。但一この身不幸にして。長年より今に至りかゝる地震にこ遭

質朴の老夫
天変とおて
主家れ火
失をすく

一寿
世晴画

あひぬ。下僕い元越後の国三條の生まれ。宝暦十一年、二十ばかりの
なりけるが、大地震ありて、家流れ、死するもの数を知らず。下僕儀
にも命の難い免れまじけれど、失火に遭て、家財農具残らず焼失ひ、途方
もなく迷ひ出、諸国を経て、伝聞へ来りて、月日を送る程に、弘化四年二月に、
また、あの大地震あり。折しも善光寺の開帳。いと賑ひそへまとより
来詣の人、数くこれ集まるもの、数に、那死怪我人多くして、人の騒動
る所、さても節も僥倖に、悪くて、来り年久しく、出
恩を蒙ふりになり。然るに最初、三條出、大震にあひしとき、怪我る人
のまぬ、ものふい、凡大地震のあるとは、夫を攝津にて空近く、星の光り
に倍して、まこと温暖なるものと、今に忘れじ。毎夜空をうちながめ、星
者のごとくまぶ心を安んじていひ、伝聞地震は二月中、彼国別して気

強きふ。この比すべて温暖なる事、常に変るとなぜ。その前夜より星
の光り、殊に大きくして、昴参の中の小星、俗に擬星と唱ふるものも、鮮明に
見るのこと、常に異ひ、殊に、ぎ立、雑子、麦を和すとあり。然て、地震の
兆と、親しき人にも、ものを告、窃に准備せるに、怪我もなきぞ。されども、此地震
のみ、けさと准備せず、夫ひめ、ばかりにて、都へ出ぬ。やはり老若数を尽して、死しる中に
悪る、人、全くその前兆を、少も、知らざる故、とも、夫より後は、俗に空を候
ぐざる夜、そのあるべ、然るに、この一両日、また地震の兆ある故、十分、用心せ
ど人、ふも、若、ひ、異城の者のみ、て、俗、りのひ、一人、人、ふ、く、迎のひけ、まこと
まを、俗ぜ、人、ふ、ふ、悪る、在する、こと、下僕、ば、歌びまと、とのひ、ひ、ぐ、ら、人、
少て、野、夫ふ、功の者、あ、ふ、ふ、歩、ふ、まとのひ、ふ、べ、ど、大ふ、歎、ま、せ、れ、ど、ふ、

接るにこの嘆ずこと。実に後来の心得とすべし。和漢之才圖舎北蕃の條にいへり。北中に蕃あつて蜂の巣のごとく。水潴り陽気光に出へ。その陰陽相和して。宜きを得るハ常に陽気波洋して出ることを得ハ。歳月を積ハ北腹を和緩まる。故に井の水涸て時気腹に強ひ。資解して爽らの時大気透とハその理に玉通して。蒸ハ上まる時に蒸天昇くるりて星の大さ常に倍して見る。北斗を天の陸にあるゆゑ雨らんとする時に山の玉通きごとく既に伏陽発出すれハ。ときゝ為に地震動して。水を以て拒め震ハ時。玉猛烈なりとハいへども。その次ハ緩柔ハ。その後微動多くあるハ伏火のゆゑ出ざるゆゑ乃至半年一年中。その後殘あるりの。但大地震の時海の汀波泥涌騰して黒き浪山のごとく沂る。世ふたとを豆奈美とのことを服る所の地暴に洋

え沈む有ごとくして洋中へ波辨にて考に加へて。豆奈美ハ海岸のこと云ふの嘆ずる星を見て変あるゝを察しるハこの説に合り消てのこの時に異後の病ずこと。敢て用心せざる人多く要亡しとうとの人文不知の老丈なりとも考る所ありて。言出ることを証べうゝ。宇治拾遺物語にのそく。唐に一人の老媼あり。朝ゝ起て後ある岳に登りて浮ること。暑寒時雨に拘らゝ。身の務とする子ごと。人その故を知ずして。夢ゝ ことを知ひろう。かくて一時弱官名老媼に此ことを問けるに。老媼答へて。この山上に年経る古墳あり。俗へ人此古墳に。若血の著てあるとハこの邑忽地陸海となること。亡文のゆゑ云。因てあのとき若き節より。朝頓起てまづ見て入るハ一家を始め各為ることを。安ふあらせんと。歩て弱官名ハ大ふ笑ひのごとくして

あるべきぞと朝りつ保りぶ。各密結へるべう。彼古墳に血て著て。老
媼を変作獣まべ。このようなる一異ありんとて。小物の死しうを索ね出
し。腹を引裂て。かの古墳ふ塗つけ。老媼い形ともあらずして。その
明の朝岳に登り。古墳をんるに豈外らん。殷血の著てあるんとへ。ちふ
放て大ふ嘆き。山上より駕ぶるわく。麓下まて土塁物き。今日この邑
に大変あり。疾く網父て居用て一刻も早く山に登れ。然なくんば
命危ふるべんと言捨てまるこ走り。邑の内を巡まるう。この言を聞
ふけるこの老媼ゞ邪ふて。未人の何をるのと疑ひしふ。人ども捨
あくべきにあらざるべ。頑に資紙雑具を減げ。完然急大の生来一
ぢ。周章て山上へ逃登る。邑の内ふても心ざそ。走れる老いたるを
ゆて。日来より律儀ぞ。老媼ゞ云放あらんと見に隨ふ者もあれど。

多くの老耄の繰言と侮りて動うねあり。殊に彼弱官なる老媼ゞ
狂ひ囈ぐて云へて。徒らそして指さ笑ふ。かくてその日未刻ばかり。
暴に大地震動して。殘つまなく海に没し。僅ふこの岳を遺せり。
ふ於て山上へ逃登りる老の外。この悉く死ふけりとぞ。これを
古墳へ殷血を著しへ弱官の所為なれど。その時ふてその一ある
こそ既に天変の兆なるめ。邑支邑婦の言とへども時として験なり。
その異きとりて侮らへ道ふらぬ人とぞそんる
○士人自此飢民を救ふ條
武人の物語に。一人の武士あり。元来落禄ふて貧しとへども。常に悪
悪の志あり。然るにこの夜大震して。その家半傾きけまど崩れに
ふるねば。まづ安堵のこひをなし。近隣ふ入れあるべし。知しき人の家

井めし
ぶっかけうどん汁

士人飢民を憐まんとて街頭に握り飯を施す

食を乞ひ。ひるゴ家へ保り来くいなを明るに程近し。于時その妻に不
してりゆやう。今青所くを巡廻りしてふ。大くゝ家焼き火災に罹りて疲後
まるるの幾千人とのふを知らんにその中あいと哀きふ足要う妻自あり。
今より仮を焚くへ拾生て施さえと来い炊けど釜小さくて。ろくなきまで
ゆくれど。是を振り仮とす。いのうて拾生んと家内をゆるに器いあ
ん。来て炊く桶にそよけまと。縄りて縛りその端を首にかけそその中へ
振り仮を登て拾生て。或ひハ道路に捨び倒まて。後方ゆゲふ負き老
弱に。かの仮をふへけまん。涙を流しまて合て歎ぶと限りなし。かの武
士も徒共に随喜の涙を流しまゝ。逢ぢりの振り仮今
ハ残まゝくなりにろ。程道路に呻吟りの幾百とのふ限りもあくに仏の
とぞ渠多にも哭んとあり人と物のあらざまんば力ならざるを。悲憂て立

戻らんとせ所に井めの汚穢出して仮て驚く家のありけまん。五十年
ひと立よりてその仮振を仮にて。有る限りて妻まとの。亭らと覚き
漢ふ。家出吾俳活業にいひんど。今日ハこの涙ぎゆそ親族の方へ行ら
んと禁る仮出そひへん妻るとハなり難。と断まとの武士ハ大ふ怒
まて妻くぬりのるくなどて行牝を出しるる吾を雑士と侮りそ
ハ此のふ中心海ぐくし一旦武士ぶ笑うけくるを笑でやハあるべきと自服
つあてのひけまん。亭らハ見に懼まを巳。青板を出せしハ家族多ふ
海遠ひ今日ハ南ひをしー待ちんに曲て弁まの人と倍徒ど武士ハ行
入まん。今より後ハ何ふもせよ。我ハ青板をうんて来りしたのうで空く
出去るべき。衣左のまぎに頼くまを妻まと。羅とりて切に責らまて。亭らと
額を拭ぬぐ。さくん妻まとその来くせんぐとの炊捕に入るなくこの仮

こゝろ定めん。彩てハのらく迷惑ゐり。米にて絆一のへとのへども可ばいこゝろ
奏主と揭に勝てうち拭て。動くべき絆もあゝば。亭ゝ之ハ幸ゞて君ゞ
家族数個在ものゝ存ぜゆゞこの米にて一俵の縛ハ足りゆべきを。法てわ些
如此宣ハて。吾ハ迫つまて行牝を出ーゝりしを咎ゆて。責ゐこの人ハ両刀を
帯のみに似合ーゝゝゝ。曲てこの義ハ許させのへとハに武士点張て。吾
家族に食ものゝ奏ゞとの人をゐゞて責人。我ハ此ゝゝゆて拾俵を
拾出さりしゞ器小さゝゝゐゞまに施ーゐゞ。遺憾にゐゝその折ゐゝ
に行牝のあるとりて。拉入ものゝ俵あり。今求めて飢人に与へんとゐゝ
ぞゐゝと侍て亭をいうち笑ひ。この俵とその二升俵り限りもあゝ
飢人を。十分ゞ一も救ひ難けん。拾め施ーのゝゆて。四志ハ達ーゐゝ。このひ
果ねに武士ゞりゐゐ我分除にて。数個の人をゐ救ハん。汝ゞ言を侯ハ

ーて。我もよくそをハ知るゐり。我もとゞもゐゞ懐に些ゐゐりの黄金を拾を
ゞ。その限ゐハ救んと。元来ゐゞ情欲ゐり。汝もまゞけて我ハ与さゞ陰徳の
猶ともあゝん。去来頼ゐと肩にかけゐる。炊桶をさゝつをハ亭主ハ
この元忽地ハ形を改めて武士と作ぎ祝て額著ゐ。さても賢き四心
ゐゐ。世に善老のありといへども君ゞ如きハ稀なるべー。その志ーを承ハ
まゞ。何条否むてあゝん。僕を案めゞこの俵を君に与ゐゝーゐけまゞる。
勿て君まゐ肯ひのゐ。困て白米の料を受納あゞゐ薪の代ハ君に
力と食さんのことまゞ免ーのへとハ。武士ゞて大ハ歓び別件の俵を
拾り。拾出て与知ゐる人ハ。施ーて帰りーゐゞ

按るにこの武士。かゐる凶変の時にあひて。家の破壊を顧ゐゞ。元
より事足る身にもあゝねを。資財を損て飢民を救ハ。実ハ善

者とのことも可なり。世に金銭を拾るるものも。この老あるハ稀なり。
遍世細の金銭を捐て。人を恤むことあるとき。その姓名を彰ハして。法
を衒ふの心あり。先年米穀飢饉して。餓民街に縦横したり。
或富家夜毎に粥を焚き。撞鐘に納て恵ハせり。或ハ搗と
郷頭に在る。貧人を食に與へ。ことごとく救てその名を顕ハさざ前
後五十餘日ゴ間一夜もこれを闕てなしとぞ。ことごとくや実の陰徳
ろうん五雜組にのたまく云く。貨財を猶して權貴に媚まじ。肯て
些微を捐て貧乏を済ハぶ。これ天下の通惑なり。と和漢古今
常人の情毫末も差ひなし。是に反して懲寡く。他人の為に計
るものハ。千に一二のこと

安政見聞録巻之上終